■巻頭特集／楽翁（がくおう）の里・桑名の文化を伝える「多度雅楽会」

妙なる調べと典雅な舞が魅せる悠久の美

楽翁と呼ばれ、文化人としても名高い松平定信、そのゆかりある桑名藩では雅楽が盛んに演奏されていました。「多度雅楽会」は、その伝統を復興、継承し、だれもが雅楽を楽しめる場を創ろうと、平成12年に設立され、六華苑の舞楽会（毎年春秋）のほか文化祭など、地域振興の舞台を中心に活動しています。

多度山中の館で稽古に打込む 口伝による習得が一番の早道

桑名の奥座敷とも言える多度山中に、「多度雅楽会」を訪ねたのは9月半ば。八壷渓谷の険しい岩肌を覆う木々の葉はほんのりと色づき、わずかに紅葉が始まっていました。

稽古場である「多度雅楽庵」（通称「がくあん」）が近づくにつれ、かすかに聞こえてくる笛の音。古くは禊所（みそぎどころ）と言われる館では、三人の少女達が童舞（わらべまい）（児童少女の舞）「迦陵頻（かりょうびん）」（極楽に住む人面鳥身で美声の霊鳥・迦陵頻伽（かりょうびんが）に由来する舞楽）の稽古をしていました。

「雅楽の舞には、日本古来の歌謡を起源とする『国風舞（くにぶりのまい）』と、外来舞踏を起源とする『舞楽』があります。どちらも平安時代に国風文化の影響を受け、外来文化を受け入れつつ日本人の好みに合わせる形で再構成され、日本の伝統文化として継承されてきました」と語るのは、館主の田中松緑さん。

田中さんは「ア～ルラ～」と唱歌（しょうが）を口ずさみながら、自ら舞ってみせることで少女達を指導。「雅楽は『歌が舞』の世界。舞も楽器も口伝による習得が一番の近道なのです」と言います。

少女達は全員桑名市内の中学生。文化庁の支援事業として学校から配布されたチラシを見て興味を持ち、応募してきました。7月から月1回の割合で稽古を始め、今回が3回目。クラシックバレエも習っている少女は、「難しいですが、舞の衣装もきれいだし、体で表現するところが共通していておもしろいです」と話してくれました。

続いて、男性二人の稽古が始まりました。二人が舞うのは「延喜楽（えんきらく）」。仮面をつけず、文人姿でゆったりと舞う優美な平舞（ひらまい）です。

「テンテ～ン テンテンズンドウ」と田中さんが口ずさむのは太鼓のリズム。童舞の「迦陵頻」とは異なり、優雅さの中に力強さを感じさせます。

みなさんは、10月3日（土）の「桑名の殿様 御台所祭」でデビュー。さらに、11月28日（土）・29日（日）の「桑名 六華苑 秋の舞楽会」出演に向けて稽古を重ねます。

六華苑 秋の舞楽会

日時：11/28（土）10:00～・13:00～
11/29（日）10:00～・12:00～
予定演目：振鉾三節、萬歳楽、延喜楽、陵王、散手、迦陵頻ほか
主催：多度雅楽会（http://www.tadogagaku.com/）
共催：桑名市文化・スポーツ振興公社 ほか文化庁等助成事業
●入場無料（ただし入苑料300円必要）
問合せ：田中松緑 ☎0594-48-3484
※駐車場に限りがありますので、養老鉄道など沿線鉄道もご利用ください。当催事は、桑名市文化協会会員の市民活動であり、多度大社の神事ではありません。

雅楽は音楽・舞・装束美の総合芸術 少人数で最高の演奏ができる舞台に

多度大社の神事に奉仕する伶人（れいじん）（雅楽の演奏者）の家系に生まれ育った田中さんは、幼い頃から雅楽に親しんできました。「多度雅楽会」を立ち上げたきっかけを、次のように語ります。「雅楽は、鳳笙（ほうしょう）、篳篥（ひちりき）、琵琶、箏（そう）・太鼓といった管・絃・打の楽器で構成されるオーケストラに、華麗な装束で舞う舞楽も加わった貴族文化の香り高い総合芸術。でも、この辺りでは寺社の祭典など、限られた時間しか皆さんの耳目に触れることがありません。そこで、もっと多くの人々に雅楽のすばらしさを味わっていただき、また、能楽や箏尺八など邦楽と同じく市民の文化活動として雅楽を継承発展させていきたいと考えました」

現在、25名程の会員は、世襲などではなく、雅楽の魅力にひかれて集まった人ばかり。東京にも稽古場があり、深川にある東京奏楽所や渋谷駅前の会場などで、週1～2回ほど稽古して、六華苑の舞楽会ほか、東京の定期公演にも参加できるとのこと。

絢爛豪華な舞台を創り上げるには、いろいろな苦労もあるようです。「特に大変なのは、演奏までの諸準備と後片付け。楽器や装束の調達・運搬などに時間や労力もかかりますし、雅楽の装束は日本服飾美の粋を極めたものだけに、その着付けや保管にはとても気を使います。」と取材に同席した会員の舞台経験者も語ります。

「会員の年齢も10代～60代と幅広く、学生や主婦、自営業、会社員など職業も様々。

会員一人一人の力量やライフスタイルに合わせて稽古量やパートを決め、小人数でも最高の演奏ができるよう努力しています。今後はさらに質を充実したいですね。六華苑の舞楽会はリピーターも多く、前年よりも質の高い演奏を楽しんでいただきたいです」と、田中さんは笑顔で答えてくれました。

「多度雅楽会」では、日本古来の雅楽の形を大切にしており、屋外での演奏がメイン。四季折々に音調が異なる雅楽の音色は、西洋音楽に慣れ親しんだ私達の中に眠る日本人のDNAを呼び覚ましてくれます。

右方平舞「敷手」

⑤六華苑に妙なる楽の音が響き渡れば、平安の昔に戻ったよう
⑥美しい装束と銅拍子で、童舞「迦陵頻」を舞う少女達
⑦左方と右方の舞人が鉾（ほこ）で舞台を清める「振鉾」
⑧六華苑でジョサイア・コンドル設計の洋館を背景に舞う童舞「胡蝶」

右方（朝鮮半島など北方系伝来の舞）走舞（舞楽面の舞人が桴［ばち］を持って闊達［かったつ］に舞う）「納曽利」

①左方（中国やインドシナなど南方系伝来の舞）平舞「春喜楽」
②多度雅楽会稽古場「楽庵」［がくあん］の母屋「葉室館」
③父子龍の舞うがごとく二つの渓谷を挟んだ巨岩の上にある離屋「龍渓館」は、全国の楽人との交流の場所
④龍笛を奏する多度雅楽会館主（代表）の田中松緑さん